

若者ことばにおける「なんか」について

李 秀 賢*

目 次

1. はじめに
 2. 先行研究の検討
 3. 調査の概要
 4. 若者層に見られる「なんか」の使用例
 5. 高年層に見られる「なんか」の使用例
 6. おわりに
-
-

1. はじめに

ことばは、それを使用する人の属性によって違ってくる。その人が属する社会階層、地域、年齢、性別そして教養などによってことばの使用が違ってると言える。このようにことばの変異に関係する外的要因はさまざまである。共時的視点における言語変異を見る時、世代差が見せるバリエーションはもっとも重要な変異の1つであると思う。

世代によって明示されることばのバリエーションのパターンはいくつかある。まず、高齢者の人がよく使う「シルバーことば」、30代から50代の働きがかりの世代が使う「ミドルエイジことば」、10代から20代の若い人たちが使う「若者ことば」や小学生などの児童が使う「児童語」などがそれである。一口に日本語と言ってもその実態はさまざまであると言わなければならない。

世代差を考える場合、これまでの日本語の研究では、ことばの歴史を解明すること

* 慶北大学講師

に集中していたため、世代間の変異をことばの通時的変化のモデルと見立てて、通時的変化のプロセスから逸脱するような、ある時代を共に生き同じ時代の空気の中を過ごしてきた特定の世代に認められる言語変異は、研究の対象外という扱いを受けてきた。しかしながら、日本語の研究の枠組みが変化し、通時的な研究から共時的な研究への重要度が移り変わるの中で、従来、見過ごされてきた世代間の言語バリエーションが社会言語学的な観点から日本語研究の進展に大きな意味を持つと考えられるようになった。

本研究では、以上のような視点に立って、共時的研究の観点から世代差を明確にすることを目的に「若者ことば」に注目したい。

現代の若者ことばの典型としてよくあげられるのはスラングであるが、本研究では、「若者ことば」を現代の若者のことばづかいや行動を含む言語行動の総体と考え、若者たちが使用するスラングや、他の世代の人があまり使わない新造語にだけ焦点をおくということはない。なぜなら、若者たちの会話では、新造語もちろん用いられているが、その大部分は他の世代も使用する既存のことばが用いられているからである。

そこで、本研究では、スラングに代表される特定の語彙に注目することなく、すべての世代が使用する語彙に注視して、若者世代の言語行動の特徴にアプローチしてみたいことにする。

2. 先行研究の検討

最近、若者向けのテレビ、雑誌、漫画や日常の会話などでよく耳にすることばに「なんか」「とか」「みたいな」「じゃないですか」などがある。このことばは既存にあったことばをそのまま使用している。このようなことばに注目している研究は、小矢野(1996・1998)、阿部(1998)、天野(2001)などがある。

小矢野(1996)では「みたいな」「って感じ」などの表現は広い意味での比喩であって、直接的な断定を避けた婉曲表現であると言う。若者は相手のことを気遣うと同時に、自分に向けられる矛先をかわすために断定的な言い方を避けると指摘されることがある。しかし、これは若者に限った現象ではないと述べている。

また、小矢野(1999)では、『週刊ポスト』の中の女子大生の会話を見ながら最近の若者語事情を述べている。まず、「じゃないですか」の用法を例を上げ、3つに分けて説明している。

(1) 夕方に配達してくださいってお願いしたのに、まだ届いてないんですよ。夕方には届けますっておっしゃったじゃないですか。どうしてなんですか

1つ目は、例文(1)のように伝統的な用法で、客が店員に対して叱ったり、苦情を言ったりする時に見られる。

(2) ほら、こないだ飲み会やったとき、〇〇君、めっちゃ酔っぱらってたんじゃないかあ

2つ目は、聞き手も知っている事柄を示して話題を共有しようという気持ちを表す。

(3) 私ってコーヒーがきらいじゃないですか

3つ目の用法は、話し手が自分のことを聞き手に伝えるのだが、聞き手は話し手の内容を知っているとは限らない場合である。この3つの用法を提示しながら、特に3つ目はルールを違反しているという側面はあるけれども、相手の知らないことを知っているかのように共感・同意を求めているので、話を自分のルールに乗せてあげる。つまり、自分の場に、相手を取り込んでしまうテクニックであると述べている。

「てゆうか」について小矢野は、もともとの使い方が発展して、「しかし」のような反対の関係にある内容を続けるための合図の機能を持つようになったと言う。「違う」「そじゃない」で言えば角が立つところを、「てゆうか」を使うことによってちょっとかわして別の角度から自分のアイデアを示すという意識で使うと述べている。

天野(2001)では、若者のぼかし表現を「とか」を中心に説明している。天野は、「とか」の従来の用法は一部例示と断定回避である一方、若者世代の用法については下の例文(4)のようなものと限定している。

(発話者は20代女性である。この発話は、普通は女性が行かないような中華料理店に不本意ながら一人で行くことになり、ラーメンを夕食として食べるという自分でも驚くような出来事があったことを友人に伝えている。)

(4) ラーメンとか食っちゃってんだよ

例文(4)の「とか」は、「ラーメン」以外の要素、つまり「餃子」「チャーハン」などと並立するものとして「ラーメン」を一部例示していない。また、「ラーメン」

を断定回避しているわけでもない。ここでは、「ラーメン」を夕食として食べていると強調していると天野は説明している。つまり、天野はこの場合「とか」はぼかす言い方・自信のない言い方ではなく、むしろ強く示す言い方であると主張している。そして、若者にぼかし表現が多いとしても、若者ことばの特徴がぼかし表現であるとは言えない。ぼかし表現は昔からさまざまな形であったものであり、世代間のキャップなしに用いられてきたためである。であるから、それよりも「めっちゃ」のように新しい語形や用法を持っている表現が若者らしさを表現するのにもっと効果的であると結論づけている。

以上、若者の間で用いられている既存のことば「みたいな」「って感じ」「じゃないですか」「てゆうか」「とか」について、先行研究を検討した。見たように「なんか」に対する先行研究は見当たらないが、これによって、既存のことばが、若者の間ではその意味が拡大したり変容されて使われていることが確認できたと思う。しかし、小谷野や天野の研究ではいずれもが若者世代が使用していることばだけに焦点を当てていたため、比較・対照という観点から若者ことばの特徴を明確に論じることはできなかったと思う。それは、若者に特徴的とされることばは、実際には若者だけが使用していることばではなく、他の世代の人たちも使用していることが普通で、他の世代との比較なしに若者ことばの特徴を語るのは無理があろう。さらに、このようなことばの特徴をあいまい表現であると締めくくっているが、その前に、ことば 1 つ 1 つに関する用例分析が先行すべき研究であると思う。そこで、今回の研究では「なんか」に注目してみることにする。

3. 調査の概要

本研究で使用する談話資料は次の調査によって採集したものである。

- ①調査時期：2005年12月
- ②調査地：大阪
- ③インフォーマント：親しい人同士である大学生 2 人ずつ 5 組と、60 代 2 人ずつ 5 組¹⁾
- ④調査方法：会話の録音。話題はまず、7 つ提示して²⁾その中から 1 つを選んで一

1) インフォーマントを若者層と中高年層に分けたのは、中年層を調査対象に入れても、その結果を論じる時、結局、若者層と中高年層の中途半端な結果を述べることが予想されるため、もっと効率的な調査のため 20 代と 60 代に限定している。

人は賛成側、もう一人は反対側になって話してもらい、それを録音し、文字化した。

4. 若者層に見られる「なんか」の使用例

4-1. 不定の物事をさす時

「なんか」は、そもそも代名詞「なに」に助詞「か」がついた「なにか」から転じたものである。この基本的な意味はそのまま、音変化により「なんか」になった場合である。

[1] (出張で韓国に行ったことについて話している。)

A 韓国に来ておもしろいこと、何か (なんか) 3)あった?

B 全部おもしろかったで

4-2. 感想を言う時

下記の例文【2】のように、感想を述べており話者の主観的な判断や態度が現れている。

[2] (友だち同士の2人が海外出張の時泊ったホテルについて話をしている。)

A ホテルはどうやった

B ホテルはなんか意外に快適やった

A あーそーやな

4-3. 人に何かを説明する時

2) ①「残虐ゲームの18禁ソフト」に賛成ですか。

②「ドッグカフェ」に賛成ですか。

③「郷に入っては郷に従え」に賛成ですか。

④「大企業より自分のやりたいことができる所で働きたい、就職するならどちらかというと大企業の方がいい」どちらに賛成ですか。

⑤「結婚した女性の社会進出」に賛成ですか。

⑥「家庭はかかあ天下と亭主関白」どちらに賛成ですか。

⑦「家族は大家族の方がいい」に賛成ですか。

3) 《不定の物事をさす時》の「何か (なんか)」は、「なんか」そのものが持っている意味自体を表しているが、以下の「なんか」はその文章の中、全体の意味を和らげたり、話し方に影響が及んでいる。したがって、《不定の物事をさす時》の表記は「何か」のように漢字を使って、他の「なんか」とは区別することにする。

下記の例文【3】【4】は両方ともに人に何かを説明する時「なんか」を使用している。

例文【3】は頭の中に考えがちゃんとまとまっていない状態で、何と云えばいいかわからない時、その表現を探す時間を稼ぐため用いている。これに対し、例文【4】は前に話した内容を後で、もっと具体的に例を挙げながら説明をしている。

4-3-1. 何と云えばいいかわからない、またはその表現を探す

[3] (親しい友だち2人が家族について話している。)

A うち2人やけど

B うん

A やっぱ弟のほうを優先させる場合が多いやん

B あー、あ、下の子やから

A うん、そうそうそう

B そうやな、えーでもやっぱ下の子は下の子でさ、おさがりいややとか言ったりするやん

A そうやな、お年玉はいつもうちの方が多かったけど

B あ、そうやん

A その微妙なあれが嬉しかったで

B そうでもあんまり大家族になるにさ、なんかなんか、なんなんというかな、かまってられへんようになると、かまってられへんようになる気がする

A あ、子供？

B そうそうそう

4-3-2. 具体的な説明

[4] (友だち同士の2人が大家族について話をしている。)

A 話聞いてたら

B うんすごい昔の知恵を知ってる子とかおるやん、おばあちゃんと暮らした子とか

A うんうんうん

B そいうのもちよっとうらやましい

A あーでもそうね、おばあちゃん、なんか一緒に住んでなくてもさ今から田舎帰るねんとかいって

B うんうんうん

4-4. 言いにくい内容を話す時

言いにくい内容の前に「なんか」を使用して、その内容を和らげる役割を果たしている。なお、主観的な自分の意見が入るため、自分の意見が強く表れるのを避け、和らげるまたは、自分の判断が正しいかどうか相手の反応を見ている。

4-4-1. 相手の意見に否定的な判断をくだす

[5] (友だち同士の2人が残虐ゲームについて話をしている。)

A 敵のところへ首きて後ろから骨おったりとか

B めっちゃぐいや

A めっちゃぐいのやってたけど

B すごい

A あれは、あれで楽しかったから

B うーん

A 別の世界でストレス発散してるみたいな感じ

B なんかそういうのでストレス発散するのってちょっとどう

(お互い笑う)

4-4-2. 話の話題に否定的な判断をくだす

[6] (親しい友だち2人が亭主関白について話している。)

A え、これ結構性格によるくない？

B うん、性格やな

A うん

B どっちかちゅうとめっちゃしりにしきたい

A え、そうな

(中略)

A でもな、亭主関白は なんかさ、そう、俺についてこいみたいな

B うん

A そういうのはあんまり俺についてこいじゃなくて

B うん

A 一緒にいきたいから

4-5. 話題転換

[7] (友だち同士の2人が家族について話をしている。)

A え、子供同士けんかしたりしてさ

B うん

A 大きくなっていった方がいいや

B うんうんうん

A そうそう、別の意味で他の世界知ってるみたいな

B うん、そうそうそう

A 逆に弱肉強食になるけどな

B なんかうちの友だちでさ、5人兄弟の子がおって

A うん

B なんかいつもプリン買ってきたら

A うん

4-6. 一呼吸置きたい

米川(1996)は、若者たちの会話の機能を7つに分けている⁴⁾。この中に、会話促進機能がある。これは、会話参加者全員の会話を盛り上げるためのものであり、「ノリ」を求める若者にはもっとも重要なものであると言える。

今回のデータでも若者たちの会話で、途中にポーズが入ったり、沈黙があることはほとんど見られなかった。このようなテンポの速い会話の途中、下記の例文[8]のようにポーズをおくことは稀である。

[8] (友だち同士の二人が外国のプリクラについて話している。)

B 安くとれるかな、あれ

A えー一万ウォン、

B あーそんなもんか

A でもなんか・・・

B 何枚もらえる

A え、何枚やろう、2枚とかかな分かんけど

B それで一枚ずつかな

5. 高年層に見られる「なんか」の使用例

4) 娯楽機能、会話促進機能、連帯機能、イメージ伝達機能、隠蔽機能、緩衝機能、浄化機能など7つに分けている。なお、ここでは会話促進と娯楽のために使用することがもっとも多いということを指摘している。

高年層では全体的に若者層より「なんか」の使用が減っている。また、例文【9】のように、若者層の使用例〈3-1. 不定の物事をさす時〉の「なんか」も高年層では「なにか」の形で用いている。

[9] (郷に入っては郷に従えについて話をしている。)

B まあでもそういう、ああいう政治のことはまあよく分からないけどもね

A うーん

B だけどやっぱりあのうー、これは賛成できる場合もあるし反対できる場合もあるし色々やね

A はい、いろいろありますね

B うんほんまにね

A 郷が何か(なにか)ということや

5-1. 感想を言う時

若者層で用いられた使用例と同様に、感想を述べており、話者の主観的な判断や態度が現れている。

[10] (亭主関白について話をしている。)

B まあ、私の両親は明治生まれ

A はいはい

B 亭主関白と

A はい

B 亭主関白な、おふくろはまあ、控え目やけども段々こう忍耐が、忍耐忍耐で我慢してですね、家庭の犠牲になったということいつも

A あー

B 今はまるきり違ってきましたね、協力、協力、協力、協力、協力その話ばかりですね、たいてい不満が、顔見たらなんか不満持ってるなどと思ったら

B うんー

A たいてい家のことしてくれないとか

5-2. 人に何かを説明する時

この場合、若者層では〈何と言えればいいか分からない、またはその表現を探す〉と〈具体的な説明〉という2つの使用例を見せたが、高年層では、何と言えればいいかその表現を探す時多く用いられている。

[1 1] (郷に入っては郷に従えについて話をしている。)

A 上の人の意見を聞く、聞かないという問題じゃなくて、あのう何でもやっぱり自分の意見を必ず持つてるといふ風な人になってほしいなと思いますね

B はい

A たとえば、あのう特に女の なんか、それがパートの人 なんか あのうまあ身分を保障されてないような人たちがたくさんいてるじゃないですか。

B はいはい

A その中であのう優劣というのをつけるとしたら、あのうどういう風につけるかなって考えたら定職が一番発言権があって、じゃパートと他の人が発言権がないかと言ったら、そうじゃないですよっていう風な感じで私は考える

5-3. 言いにくい内容を話す時

相手の意見に対する否定的な評価より、話の話題に否定的な評価をくだしているとき使用されている。

[1 2] (女性の社会進出について話をしている。)

A 女性の方がね料理できなくて、男性の方が料理をするとか

B あのう結婚してる奥さんが料理全然だめとかね

A そういった話はよく聞きますね

B ちょっとあの男性と女性が なんか その、逆転してるような感じがしてきますし男性があのおう男らしさっていうのがどこで男らしさというのよくわからないけども

高年層では相手の意見について否定的な評価をくだす時は、下記の例文【1 1】のように若者層に比べ直接意見を表している。

[1 3] (亭主関白について話をしている。)

A どっちがかかあ天下がいいか亭主関白がいいかこれははっきりよく分からないと思う

B マスタケさんはどっち?

A 三角

B 三角? ずるいね、ちょっとそれは

6. おわりに

以上、「なんか」の使用例を若者層と高年層に分けて考察してみた。

まず、若者層では大きく〈不定の物事をさす〉〈感想を言う〉〈人に何かを説明する〉〈言いにくい内容を話す〉〈話題転換〉〈一呼吸置きたい〉など使用例を6つに分けることができた。一方、高年層では〈感想を言う〉〈人に何かを説明する〉〈言いにくい内容を話す〉の3つの例で「なんか」が使用されており、〈不定の物事をさす〉〈話題転換〉〈一呼吸置きたい〉では、「なんか」の使用は見られなかった。また、〈不定の物事をさす〉時、高年層では「なんか」ではなく「なにか」を用いていた。

このように、あいまいさを持つ「なんか」もその中でいろんな使用例を見せていることがわかる。一見意味もなく用いられていると思われがちである「なんか」も、実は発話調整や話題転換などの役割を果たしている。

現代における若者世代は、自己主張が強い一方、相手には踏み込まれたくないという気持ちも強いと言われる。人との対立を嫌い、傷つくことを恐れているというのである。そのため、あいまいな表現を使って断言することを避け、できるだけ柔らかくコミュニケーションをとろうとする意識が働いているのだろう。「なんか」もその一部分であるが、相手との対立を避けたいという気持ちの裏付ける表現の1つとして若者の間で多様化されていると思う。

また、若者ことばの多くは消滅し、定着し受け入れられたわずかなものだけが使用され続ける。ことば自体が常に変化するものであるから、その変化を止めるのは難しい。だからと言って、古くからあることばを捨ててしまえと言っているわけではないが、「最近の若いものは」と非難するだけでも意味がない。つまり、若者たちのことばの使い方を見ることで、ことばが変化するダイナミクスをより理解することもでき、若者世代に対する理解も深めていくことができるだろう。

【参考文献】

- 阿部圭子(1998)「談話研究におけるデータの活用について—ビジネス談話データの事例から」『日本語学』9月号、pp42～51 明治書院
- 天野みどり(2001)「若者ことば—銅メダルとかがった」『東山南北—イメージと言語』和光大学総合文化研究所

- 飯野公一・恩村由香子・杉田洋・森吉直子 (2003) 『新世代の言語学—社会・文化・人をつなぐもの—』くろしお出版
- 井上史雄(1994)『方言学の新天地』 明治書院
- 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 任栄哲・井出里咲子(2000)「似ていて違う?ことばと文化の日韓比較」『言語』7~12月号
大修館書店
- 尾崎喜光 (2001) 「日本語の世代差はなくなるか」『言語』1月号、pp66~73
大修館書店
- 香山りか (2002) 『若者の法則』 岩波書店
- 小矢野哲夫 (1996)「現代若者ことば考」『ユースネットワーク』ユースサービス大阪
_____ (1998)「若者の程度表現」『高校国語教育』三省堂
_____ (1999)「最近の大学生の仲間ことば事情」『あきかな通信』あきかな通信編
集委員会
- ダニエルロング・中井精一・宮地弘明 (2001) 『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界
思想社
- 佐竹秀雄 (1995) 「若者ことばとレトリック」『日本語学』11月号、pp53~60 明治書院
_____ (1997) 「若者ことばと文法」『日本語学』4月号、pp55~64 明治書院
- 陣内正敬 (1997) 「若者語」『日本語のみかた』朝日新聞社
- 辻大介 (1999) 「若者語の対人関係—大学生調査の結果から」『東京大学情報研究所
紀要』57号
- 永瀬治郎 (1999) 「語の盛衰—キャンパス言葉の寿命」『日本語学』9月号、pp14~24
明治書院
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分
析」『日本語教育103号』12月号、pp49~58 日本語教育学会
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版

要 旨

現代の若者ことばの典型としてよくあげられるのはスラングであるが、今回の調査では、「若者ことば」は、現代の若者のことばづかいや行動を含む、言語行動の総体であると考え、若者たちが使用するスラングや、他の世代の人があまり使わない新造語にだけ焦点をおくことはしていない。なぜなら、若者たちの会話では、新造語もちろん用いられているが、その大部分は他の世代も使用する既存のことばが用いられているからである。

今回の調査から分かるように、若者世代では〈不定の物事をさす〉〈感想を言う〉〈人に何かを説明する〉〈言にくい内容を話す〉〈話題転換〉〈一呼吸置きたい〉など使用例を6つに分けることができる。一方で、高年層では若者世代に見られた〈不定の物事をさす〉〈話題転換〉〈一呼吸置きたい〉の時の「なんか」の使用は見られなかった。また、〈不定の物事をさす〉時、高年層では「なんか」ではなく「なにか」を使用していた。

あいまいさをもつ「なんか」を好んで若者が使用する傾向は、若者たちの間では「若さ」をアピールする表現の1つとして使用されているようである。同時に現代の若者はマサツ回避の世代であるということや、対人関係において「ソフトさ」を好んでいると言われているが、「なんか」もまたそれを裏付ける表現の1つであろう。

キーワード : 若者ことばの特徴、あいまい表現、なんか、
世代差、若者ことばの使用例、日本人の言語行動

투 고 : 2006. 8. 31
1차 심사 : 2006. 9. 9
2차 심사 : 2006. 9. 30

住 所 : (706-780) 대구시 수성구 신매동 에덴타운 253동 201호
電 話 : 011-9378-6635
e-mail : shleek@hanmail.net